鉱石倶楽部

猫柳ハヤ

黄玉ー石言葉ー

　地下鉄のプラットホームはいつも生暖かく、11月だと言うのにじっとりと汗が出る。電車が来るのを待ちながら、ホームの先にある暗いトンネルを見ていると、徐々に狭くなる黄玉(トパァズ)色の燈りが僕の視線を誘っている。自分の立っている場所を見失って吸い込まれていきそうだ。
　暫くするとトンネルの奥から低い音と、ホームの中の空気を掻き混ぜる不快な風がやって来る。その後を追うように電車の到着を告げる電子音が響きだした。
　滑りこんだ電車のドアが開くのを待って、車内に入る。途端、背中を軽く押された。
「やあ、」
　降り返るとそこには少しだけ息を切らしたシアンがいた。
「一人で帰るなんて、水臭いじゃないか、」
　黄水晶(シリカ)の瞳に意地悪な笑みを載せて僕を見る。
　彼は知っているのだ。僕が帰り際に声を掛けそびれているのを。
　そう思うとどうしようもなく不愉快な気持ちになってしまって、ついつい声に棘が出た。
「君こそこんなところで何してるんだ。レスと帰るんじゃないのかい、」
　さっきまで一緒にいたはずの級友の名前を出す。
「彼は環状バスだ。一緒に帰るはずないだろ、」
　くすくすと声を立てる。気まずくて目を逸らしているにもかかわらず、シアンは無遠慮に覗きこみながら視線を捕まえにきた。
「妬いてるのかい、」
「まさか、」
　余裕無く答えた僕がよほど滑稽だったらしく、シアンは声を上げて笑う。黄水晶の中に厭味が無かったので、僕もつられて笑った。

「何処へ行くんだい。エルの家はこっちじゃないだろう、」
　規則正しい律動で走り続ける地下鉄の中で、シアンは隣りに座る僕の耳元に口を寄せて話し掛ける。
「買い物さ。」
　僕も同じように耳元で答える。
「露頭庵に行く。」
「鉱石(いし)を見に、」
「11月の誕生石を買いに、漸く小遣いが貯まった。」
「一緒に行ってやるよ。エルは鉱石を見る目が無い。」

「黄玉(トパァズ)くらい分かる。」
　思わず顔を逸らす。いくらなんでも黄玉くらいは僕にも分かる。
「そんなこと当然さ。ただ、偽物の黄玉が出回っているらしい。」
　喉の奥を鳴らして笑った後、僕の肩に手を回すと強く引き寄せる。微かに彼の柔らかい唇が僕の耳介に触れた。
「化学式上は黄玉なんだ。だから始末におえない。」
　身体を離して真剣な眼差しで僕を見る。
　心臓の鼓動と地下鉄の走行音が頭の中でぐるぐると鳴り響いた。

　僕たちは２つ目の駅で地下鉄を降り、ホームから続いている地下道を奥へと進む。地下道の両端には小さな舗(みせ)が軒を連ねていた。
　その地下道の最奥、袋小路になったところに露頭庵はある。小さな入口横の硝子ケェスの中に色とりどりの鉱石が無造作に転がっていて、舗の中は標本棚と通路とで占められていた。いつでも人影はない。僕らは当たり前のように一つの標本棚の前に立つと、硝子戸を開いて中を物色し始めた。
　中には黄色がかった幾つかの小さな鉱石が入っていた。どれも親指の先ほどの欠片で、良く研磨されて丸みを帯びている。しかし、どれ一つ取っても同じ容はなく、僕にはその中から握り具合が良く、なにより透明度の高い黄玉を捜した。
「これは、」
　握った感じが掌にしっくりきた鉱石を一つ取り、シアンに見せる。シアンはそれを長く白い指で挟むようにして自分の右眼に当てた。
「ああ、これは偽物だ。なにも見えない。」
「え、」
「やっぱり、知らなかった、」
　シアンはその鉱石を元の場所に戻すとくすりと笑う。
「黄玉は心の中を見ることができるのさ。」
　くすくすと笑いながら、次々と黄色の鉱石を右眼に持っていき、僕の顔を覗き込む。
　いくつか覗いて見て、一つの鉱石を探し当てた。
「これは本物だ、君が何を考えているか見える。」
「何を、そんな訳ない。」
「嘘だね。君はそんな事を思ってやしないよ。」
　黄玉越しに僕を見ている。瞑られた左眼の下にかかる長い睫の影に僕は息を飲んだ。

「言っただろ。黄玉は心を透かして見る事ができるって、」

「でも、」
　シアンは続ける。
「僕はこんな鉱石(もの)なくたって、エルの心は見えてる。」
　不敵な笑み。
「僕のこの眼は黄水晶(シリカ)じゃなくて、黄玉(トパーズ)だから。」

‥了

薔薇石英ー媚薬ー

　夕方のバスターミナルは沢山の人を撒き散らしながら、紺藍と橙の滲んだ空の下に佇んでいる。各々思うままに移動しているはずの利用客は精密に計算された絡繰りのように、それぞれのバスや隣接する地下鉄の階段へと飲み込まれていった。
　普段歩き慣れない人込みに翻弄されて、僕は自分の位置を見失い呆然と立ち尽くす。整然とした流れに乗れずにただの障害物と化した僕は、はぐれてしまった友人を強く思った。
「エル、こっちだ。」
　突然手首を掴まれ、引き出される。
　ロータリーの外周に幾つか並んでいるワゴンの前で、ようやく僕はシアンの顔を見ることができた。
「まったく。相変わらずだな、エルは、」
「ごめん。有難う。」
　自分の情けなさを垣間見て俯く僕を、下から覗き込んで目を合わせるシアン。黄水晶(シトリン)の明るさの瞳がにこりと笑った。
「変わり玉だ。要るかい、」
「欲しい。」
　渇いた喉を潤すために、シアンの手にした白く粉をふいたような糖果を貰う。
　暫くすると鼻の奥がすっと抜ける。
「その顔は薄荷だな、」
　シアンの云う通りだ。地下鉄の中で舐めたときも薄荷だった。余程ついてないらしい。
　そんな僕を苦笑いと一緒に見やって、シアンは変わり玉を口に含むと口角を上げて僕を見る。
「当たりだ。ほら、」
　そう云って朱華色に変わった飴を舌の上に乗せて見せた。
「……。口の中がぴりぴりする。」
「交換してやるよ。来て、」
　咽の奥まで到達した苦味に嫌気がさしていた僕は、シアンの云った意味を深く考えずに傍に寄る。黄玉(トパーズ)色のシアンの瞳に囚われた瞬間、僕は呼吸するのを忘れていた。長い指が僕の顎に掛かる。同時に触れてくる唇。重ねられたまま入れ替わった変わり玉の味はよく解らず、ただ思ったより冷たかった。
「目を開けて、エル、」
　ゆっくりと瞼を開くと、間近にシアンの顔がある。途端に全身がどきんと跳ねた。続いて頬が熱くなったのを感じて慌てて後退る。
「もう、遅いよ。」
　シアンがにっこりと微笑んで僕を見た。
「……え、」
「それ媚薬だから。目を開けた時、最初に見た人を好きになる。」

「まさ、か……、」
　治まらない動悸にどうしたらいいか分からず、口の中の飴を噛んだ。
「あ、」
　掌に吐き出したそれは薔薇石英(ロォズクオーツ)の欠片。困惑する僕をシアンは愉しそうに眺めている。
「パックの使った惚れ薬だよ、今の季節にはこれがよく効く。」
「A Midsummer Night's Dream……、」
「真夏というにはちょっと早いけど、その分は鉱石(いし)の効能で補えるからね。」
　ちょうど日の入りを迎えた空は、濃紺に染め上がっていた。

‥了

天河石ー少年ノ時間ー

　寝台に横になっても、窓からカーテンを透かして届く星明りが眩しくて眠れない。目を閉じると映る目蓋の裏の藤色の残像が気になり、諦めて天井から吊るされた照明の中ほどにある点燈管を眺めた。
　もうどれくらいの間こんな事を繰り返しているのか。そう思って寝台の宮に載った目覚し時計を手に取る。針の示す時刻は横になった時とさほど変わっていない。秒針が無い型の所為で、時が止まってしまったかに感じた。
　仕方なしに身体を起こした僕は窓辺に寄って、カーテンを閉じたまま窓を開ける。手探りで三日月(クレセント)錠を起こし、硝子を直接触って開けるのだ。するするとサッシを滑る音と共に、もう冬に近いひんやりとした風がカーテンを膨らませた。
　呼吸するように外気と室内の空気を入れ替える布が一際大きく波打った後に、黄玉(トパァズ)の瞳の彼が立っていた。
「天河石(アマゾナイト)を捕りに行かないか、」
　露台(テラス)から入ってくるなりシアンが云う。虫の声すらも聴こえない夜半。僕は彼の言葉の意味を図りかねて、ただ黙って見つめ返した。
「目を開けたまま眠っているのかい、」
　今夜の月と同じ色のシアンの瞳がくつくつと笑った。
「こんな時間に、しかも天河石って、どうやって捕るのさ、」
　我に返った僕が少しむくれているのを知って、シアンは愉しそうに目を細める。
「降ってくるのを捕るのさ。エルは落ちているのを拾えばいい。」
　鼠を玩(もてあそ)ぶ猫のような眼。僕はシアンほど球技は得意でない。
「そういうことじゃないよ。天河石ってアマゾン川で採れるのだろう、」
「何故『天河(あまのがわ)』と充てるのか考えてみろよ。」
　そう云ってシアンは天(そら)を振り仰いだ。濃い群青の天鵝絨(びろうど)に明るい青磁色の粒子を零したように流れる天河。確かに天河石の結晶が降ってきてもおかしくはない。
　僕は光の流量に気圧されて、斜めになった機嫌を元に戻さざるを得なかった。
　頤を下ろすとそこにシアンの笑み。
「僕たちのために長くなった夜を、愉しまない手はないだろう、」
　そう云ってシアンが僕に右手を差し出した。掌には青緑の小さな天河石。月明かりに映える。いつの間に？
「さっき降ったのを見なかったのかい、仕方がないな。」
　彼は僕がその天河石を手にしようと伸ばした左手を握ると、思いっきり引き寄せる。よろめく形でシアンの胸に閉じ込められた僕は、時を打つ鼓動を直接感じた。
「屋根の中に居るからだ。早く行こう。」
「こんな時間から外へなんか……、」
「でも、眠れない。」

　確信的な彼の声に、僕はこくんと頷く。進まない時計を思い出した。
「僕たちのために長くなったって、どういう事、」
「秋分を過ぎて昼より長くなった分の夜の時間は、僕たちの時間だろう。」
　理解する間も無く彼に手を引かれて露台に出る。肌を刺す銀漢の光線。降り注ぐ天河石の欠片。シアンの瞳が夜天(よぞら)を色を取り混ぜて青磁色に発光した。

‥了

「じゃあ、向こうで。」
　そう言ってシアンと学校で別れてから二時間後。僕は使い慣れない環状バスの所為で、思い掛けないほどの時間を無駄に過ごしていた。疾うに半周は過ぎただろう。
　逆回転のバスにさえ乗っていれば、もう目的地には到着していた筈。外を流れていく景色を、窓枠に頬杖を付いて恨めしげに眺める。耳元の規則的な腕時計の秒針の音を、自分の心臓の音が追い越していった。
　漸く最寄りの停留所に到着した僕は、慌ててタラップを降りるとそのままの勢いで駆け出した。
「……此処、は、」
　気付いた時には自分が何処に居るのかさえ判らなくなっていた。記憶を頼りに進めていた足が止まる。不意に込み上げる不安。
「ーーこんな事だろうと思った。」
　俯く僕の靴先に見知った靴が向き合って揃う。驚いて顔を上げると、目の前に逢いたかった、君。
「シアン、」
　僕より少し背の高い彼が、腰に手を当てて首を傾けるように覗き込んでくる。
「環状バスを乗り違えた、」
「うん。」
　正直に答えるより他にない。
「降りた停留所が道の反対側だって云う事には気付かなかった、」
「……あ、」
　バス通りは広い道路で中央分離帯を挟んでまるで違う景色だった事に、今更になって気付く。急いでいたとは云え、自分で迷いに行ったようなものだ。
　シアンが頭の上で呆れたように肩を竦めて、溜息を吐くを感じる。
「エル。これをあげるよ、僕の為に。」
　そう云ったシアンは黄水晶(シリカ)の瞳を細めて、ふわりと笑んだ。その笑みにほっとしたのも束の間、僕は云っている意味が解らず、ただ掌に押し付けられた菫色の鉱石を見つめる。
「菫青石(アイオライト)。僕の元に迷わず辿り着けるように。」
　菫青石ごと手を握り込まれて、引き寄せられた。大きく跳ねた僕の鼓動をシアンの指がそっと撫でる。
「もう、間違えるなよ、」
「うん。」

迷わない。

深い蒼が僕の中に刻み込まれた。

‥了